

LEXUS TEAM KeePer TOM'S



2018 スーパーGT 第1戦
岡山国際サーキット
2018年4月7日(土)

予選

来場者: 10,700人

天候: 曇り時々雨

2018年のスーパーGTシリーズは、今年も岡山国際サーキットで開幕戦を迎えた。昨年のチャンピオンに輝いた KeePer TOM'S チームは、チャンピオンの称号、カーナンバー【1】をつけて臨む。ドライバーは、昨年、最年少チャンピオン 平川 亮 と ニック・キャンディ のコンビネーションのまま連覇を目標にシーズンをキックオフ。昨年の開幕戦を制しているチームとして、ポールポジションを目指してコースインしたが、予想外の低気温、低路面温度で苦しい状況となり、決勝を9番手グリッドからスタートすることとなった。



- 最初のセッション、練習走行では5番手タイムを叩き出して、予選セッションにおいて上位獲得の期待が膨らんだ。
- 予選Q1をキャンディが担当した。路面温度が低く、タイヤが本来のパフォーマンスを発揮する作動域まで温まらず、9番手タイムに終わった。
- タイム差 僅か0.01秒によってQ1上位8番手までに食い込むことができずにQ2に進出することができなかった。
- 平川は、コースインすることなく予選を終えてしまった。

DRIVER	Car No.	Qualifying 1	Qualifying 2
平川 亮	1	P9	1:18.796
ニック・キャンディ			

天候	曇り時々雨/ドライウエット	
気温/路面温度	気温: 9-7度C	路面温度: 15-12度C

平川 亮 (1号車ドライバー)



「午前中の練習走行でもしっくり来ていなかった。マシンは、昨年から進化しているのは確かなのですが、テストの段階から現在までセットアップがまとめ切れていなかったということが Q2 進出を果たせなかった理由です。決勝は、苦しい展開が予想されますけれど、できるだけ多くポイントをゲットして初戦を終えたいですね」

ニック・キャンディ (1号車ドライバー)



「この状況は、予想していなかったわけではない。ここ岡山の合同テストの段階から昨シーズンとは異なってライバルたちとの競争がより厳しくなっていることは認識していた。路面温度が低くて、十分なパフォーマンスをタイヤが発揮してくれなかったのは確かだけれど、同じ Lexus LC500 とブリヂストンタイヤのパッケージのマシンでわれわれより速いタイムをマークしているチームもいる。決勝では、なんとか順位を上げて、少なくともポイントをゲットしたい」

小枝 正樹 (1号車エンジニア)



「今日の走り出しがアンダーステアだったのでセットアップを変更しました。また、練習走行中にコースオフしてパーツを交換したのですが、そうしたら、かなりオーバーステアに変わってしまったというリポートがありました。タイヤも十分に温まらず、マシンとのマッチングも悪かったですね。オーバーステアにならなかったのならQ2進出は可能であったと思うのですが、ライバルメーカーとの差はどうなっていたか定かではありません。チョイスしているタイヤが予選よりも決勝にマッチしていると思うので、それで順位を上げられると期待しています」

関谷 正徳 (1号車チーム監督)



「ディフェンディング チャンピオンとして臨んでいる初戦でこの結果は、本当に残念です。われわれが進化していないかというと、ちゃんと進化しているのですが、ライバルメーカーが上を行っているというのが今回の結果に表れてしまいました。LC500とブリヂストンタイヤというパッケージのマシンが1台を除いてQ2に進出できていないのは問題ですね。決勝で順位をアップするためには、ドライバー2人の頑張り勝負のところが大きくなります。GT300クラスのマシンのパッシングのタイミングなどを巧みに利用しながら順位を上げてもらいたい。9番手から優勝を口にすることはできません。現実的に5位あたりを目標にしたいと思います」

舘 信秀 (総監督)



「チャンピオンの称号【1】のカーナンバーが予選 Q1 敗退とは、天国から地獄。とても残念です。いろいろな要因はあるとしても、レースは、結果が全てですから、決勝ではトムスらしい、そしてディフェンディングチャンピオンらしいレースをお見せしたい」

LEXUS TEAM KeePer TOM'S

決勝

来場者: 17,700 人 天候: 曇り時々晴れ

KeePer TOM'S チームのカーナンバー1 は、レース序盤から積極的な展開で 1 周目から順位をアップ。ファーストステイントで一時、トップを奪うという大活躍を見せた。セカンドステイントでコースインした時点で 4 位に後退したが、ポジションを一つ上げて 3 位フィニッシュを果たした。



- 昨年に引き続き、ニック・キャンディ がスタートドライバーを担当。スタート直後に上位陣で混乱があったが、その影響を受けず、逆にうまく順位アップにつなげて、1 周目に 6 位まで順位を上げた。
- タイヤが十分に温まった以降、なおもペースをアップしたキャンディは、どんどんと順位をアップ。82 周レースの 38 周目にトップに立った。
- 40 周目にドライバー交代のためにピットイン。平川 亮がコースイン。その時点で 4 位となっていた。
- キャンディがトップを奪った際に他車と接触し、ステアリングロッドが曲がってしまっていた。平川は、ストレートでも真っすぐ走れない状態の中でラップを重ねゴールを目指した。
- 苦しい走行の状況でも、ひとつ順位をアップして 3 位へ。
- 終盤に同じレクサス LC500 の 6 号車の追撃を受けるが、0.177 秒差で 3 位ポジションを守ってチェッカーを受けた。

DRIVER	Car No.	Race Result / Fastest Lap	
平川 亮	1	P3	1:21.810
ニック・キャンディ			1:21.071

天候	曇り時々晴れ/ドライ	
気温/路面温度	気温: 11-10度C	路面温度: 22-18度C



平川 亮 (1号車ドライバー)

「自分のステイントの前に、接触してダメージを受けたという情報は得ていました。しかし、実際に乗り込んでみたらステアリングを切った状態になっていて、ストレートを走っていてもステアリングは右に切った状態でした。これで最後まで走り切れるかなと心配だったのですが、だんだんとそれにも慣れてペースアップすることができました。そして9位から3位へアップして表彰台に立てたのは良かったですね」

ニック・キャンディ (1号車ドライバー)

「スタート直後にフロントローのマシンがペースダウンしたみたいで、接触はなかったようだけれど、ゴチャゴチャしていた。1周目から順位を上げることができたし、タイヤがパフォーマンスを発揮しはじめたら凄くペースがよかった。予選とは全く別物のようだった。トップに立つ直前、トップのマシンが寄ってきて、接触してしまった。大きなダメージに至らずに済んでよかった。表彰台に立てたのでまずまずのシーズンスタートかな」

小枝 正樹 (1号車エンジニア)

「気温と路面温度が上がれば、われわれが選択していたタイヤは<働いてくれる>と信じていました。それが、序盤のニックの快走につながりましたね。しかし、接触でステアリングが真っすぐではなくなってしまい、心配もありました。最初、無線で亮が珍しく弱音を吐いてきたのですが、すぐにコツを得たみたいで、ペースも上がり、順位を3位まで上げてくれました。11ポイント獲得、次戦は22kgのハンディウエイトを搭載します。少し重くなりますが、上位を目指します」

関谷 正徳 (1号車チーム監督)

「若きディフェンディング チャンピオン二人のドライバーが最高の仕事をしてくれた結果の3位表彰台です。本当に素晴らしいレースを展開してくれました。さすが2017年チャンピオンですね。チームのピットワークにもミスはなかったし、100点満点だった。次戦の富士は、マシンが軽くないと速く走れないので、22kgのウエイトは微妙なところですが、当然トップを狙います」

館 信秀 (総監督)

「トップゴールできなかったのは残念。ニック、亮の素晴らしい走りをファンの皆さんに楽しんでいただけたのではないのでしょうか。これこそレースの醍醐味です。本来のパフォーマンスを取りもどすことができホッとしています。これで満足はしていません。やはり常に狙っているのは最上位ですから」

※次戦は、5月3-4日(祝)に静岡県の富士スピードウェイにてシリーズ第2戦が開催されます。